

キリスト教の土着化の社会学的理解

—その方法論的考察—

溝 口 靖 夫

目 次

- I、問題の所在
- II、土着化の概念規定
- III、土着化問題研究の角度
 - 一、「福音の土着化」と「キリスト教の土着化」
 - 二、福音と固有社会・文化との関係
 - 三、土着化の過程と可能性の問題

I 問題の所在

キリスト教の土着化ということは、キリスト教の本来的な伝道的使命にかかわることであって、すでにその先駆としての旧約時代に、イスラエルの宗教のカナンにおける土着化の問題があり、原始教会ではローマにおいて土着化の問題があり、その他教会史上、東西を問わず各地でこのことが問題となった。近世になって、欧米諸国によるキリスト教の世界伝道が進められたが、近年になって、これについての反省と、二、三の新しい動向が現われてきた。すなわち、一九一〇年にエディンバラにおいて、国際宣教連盟 (International Missionary Council) 主催で世界宣教会

議 (The World Missionary Conference) が開かれて以来、いくつかの世界宣教の会議が開催されたが、漸次布教地の文化や社会的実状を考慮し、これを尊重すべき気運が生れて来た。特に最近一九六一年第三回世界教会協議会 (World Church Council) の大会が開かれ、その席上、「証し」の部門において、福音の伝達のために、その土地の日常の言語を用いることが提案され、又この会議の「奉仕」部門で、地域社会のための奉仕が必要とされた。かくしてこのニューデリーの大会において、今日アジア・アフリカの諸教会で、自主独立の立場に立って、西欧の教会とそれぞれの主体性を認めあった上で、相互の教会同士の人格的な関係にはいることが要請された結果、日本のキリスト教の立場としても、今後福音が日本という土地に根を下し主体性をもったものとなることの必要性が痛感されたわけである。この様な二十世紀後半を迎えるにあたっての国際的な宣教運動の新しい動向の中において、わが国において土着化の問題が近時とくに顕著になってきたのは、一九五九年のプロテスタンティズム伝来百年を契機としたのである。第二世紀を迎えるに当り、過去の反省と、将来への見透しが要請され、ここにキリスト教の日本における客観的なオリエンテーションが問題となったのであり、キリスト教の土着化ということもその一環として取り上げられたのである。更にこのプロテスタント宣教百年の契機に、伝道の実質上の成果がこの問題提起の理由となっている。百年を経た今日キリスト教信徒の数が人口の一パーセントに足りないという現状は、日本宣教の前途について真剣に考えさせたのである。日本人側だけでなく、宣教師を送っている海外の伝道団でもこれを再検討する必要を認めており、内外呼応してこの問題がクローズアップされたのである。

この様な事情により、わが国におけるキリスト教の土着化ということが問題となって来たのであって、特に一九六二年の日本基督教団では夏の教師研修会等の主題としてそれを掲げ、種々の会合でこのことが議せられた。しかるに、やがて土着化の問題提起ということについて、疑問が起って来た。というのは、この土着化という問題が、ややもすれば宣教の単なる技術の問題に偏向する虞れがあったからであり、この点で、たとえば、キリスト教界の論壇

で、或る論者は、土着化論について、日本の精神風土は福音の宣教にふさわしい風土であるかどうかと考えるものと考えかたは、じつはまことに福音的でないのではなからうか。……福音の土着化などといっていいので、ひたすらに「聖霊のお力」に信頼して「折をうるもえざるも」ただ單純に十字架のキリストを宣べ伝えようではないかと言っており、これに関連して他の論者は、一九六三年の元目メッセージとして、「どうもこの頃の土着化論議は泥迷に陥っているようです。今年度は、もうこの論議を打ち切ることを提唱します。」と論じている。⁽⁵⁾しかも、これでわが国における土着化論議が終ったのではなく昨年から今年にかけて、日本の土着化論は国際的な場所において一段と真剣な討議が進められているのである。たとえば昨年（一九六三年）七月カナダで開かれた信仰職制世界会議において、日本（信仰職制研究会委員）から出された問題の中に「福音の土着化」が含まれている。⁽⁶⁾ニューデリーでの世界会議においても、福音の土着化と最も深い関係にあるところの福音と布教地の諸宗教との関連性の問題は研究の課題として残されているのであり、国の内外において福音又はキリスト教の土着化の問題は今も尚今後の重要なテーマであることに疑いない。

Ⅱ 土着化の概念規定

土着化問題の理解のため、先ず、概念規定を必要とする。「土着化」と言われているのは、indigenizationの訳語で、これは indigenous から来ている。その語源はラテン語の in-ignere で、born-iness「うちに生まれる」ということであると言われている。⁽⁷⁾一方、「土着」という漢字は辞書によれば「其の地に永く住みつくこと」となっており、又国語としては「どちゃく」は「その土地に生まれて住みついていること」（広辞苑）とある。ところで、英語の場合も日本語の場合も同様であるが、語尾の -ize 又は -ization は辞書によれば、「……（の状態）にする」、「……化させる」又は「のように取扱う」などの意であるとあり、日本語の「……化」とは同じく、そうでないもの

をそのようにする又はそのように取扱うことであろう。ここに問題がある。或る文化が特定の土地にもともと生まれ育っているのであれば「土着」であって「土着化」とは言わない。「土着」でないものを「土着的にする」「土着の様な状態にする」ことが「土着化」である。即ち、植物がその土地を変えて移植される様に、又は動物がもともとの生地を変えて、他の土地に住みつく現象、—生物学の用語ではこの現象を「定着」(ceasing—英)という—であるように文化の場合も他の環境から移されて新しい環境に恰も他から移って来たものではなくもともとその場所に生成したかの如くなることである。根を下ろすと言われるゆえんである。かくて、文化社会学の概念で言えば、広義の適応(adaptation)の現象である。しかし、単に適応と言えば、外来のものであることが明かなままでも闘争対立がない場合適応と言えるけれども、少なくともそこには新環境との間の調和が存在する現象であり、更には外来のものであることが認識されないか忘れられるに至っている状態である。即ち土地にもともと生成したのと同じ様になることであるから、その限りでは naturalization といってもよい現象である。ただし、宗教の場合には、超自然的な神意によって凡てが生起し展開されていると信じられているのであるから、或る宗教が土着化するという場合、単にその土地に naturalize してしまうと言うのでは余りにも風土化(acclimatization)する、又は自然的なものにされるの意が強くなって、現在土着化といわれている概念にびたりしない。naturalization の場合には本来の主体性が喪失される感が強い。文化の土着化を、文化社会学上の概念で考える場合、もう一つの近似概念としては「同化」(assimilation)がある。同化とは assimilation の字が示すように同じ様にすることである。この場合も本来的に同じでないものを同じく見えるものと取扱ってもよい様なものにする、又はそうなることである。これは土着化現象と近似の概念である。しかし両者を比較すると、同化は二つ以上の文化又は文化の主体がその差異を捨象して類同点を極度に増大し行く結果生れる現象であり、複数的文化又はその主体間の異同に関する概念である。これに対して、土着化とは、単にそれらのものが異なるか同じ様であるかと言うだけではなくして、そのものの環境との関連にお

けるオリエンテーションが問題となっているのである。すなわち、同化についていえば、近代ヨーロッパ諸国による植民の場合に、スペイン又はフランスによる同化政策ということが言われたが、これは植民地の住民及び文化がスペイン文化或いはフランス文化と類同のものとなる現象を旨とした政策を言うのであって、この際現住民がスペイン又はフランスに土着化したとは言わない。原住民は生来の土地を移動しないからである。土着するとすれば、それはヨーロッパ文化の方がそれぞれの植民地に土着するということになるのである。これでも明かなように、土着化とは或る意味で同化現象の中に加えられるけれども、両者は互に他を包摂し得る概念である。すなわち、同化の中に土着化の場合もあり得るし、土着化の理由の一つとして同化現象を挙げることまでできる。

Ⅲ 土着化問題研究の角度

キリスト教界において従来問題とされたのは、主として神学的理解であるので、それと社会学的理解との関係を考えた。

福音またはキリスト教の土着化が取り上げられる角度に、概して次の二、三のものがある。

一、「福音の土着化」と「キリスト教の土着化」

第一は「福音の土着化」と「キリスト教の土着化」という二つの概念の規定及びその比較、関係等についてである。これらはもちろん同一の事実を言い表わしているのであるが、論理的には一応分けて考察する必要がある。両者の違いは「福音」と「キリスト教」という二つの概念の比較になる。福音というときは、神学的に神からの特定の人又は社会に対する直接的な語りかけの言であり、その限り福音は常に必ずしも特定の自然的環境或いは文化と固定的に結合したものではない。神の言はいかなる土地の個人又は社会にも直接的に働き具体化される可能性が信じられ

るのであるから、この意味では福音の土着化という語も特に用いねばならない理由はない。考えようによっては福音の土着化論義不要論などもこの様な神学的根拠から成立するものであろう。神の言が直接的に日本なり中国なりに実化されるならば、それははじめからその土地に「受肉」したものであるから土着化という必要はない。しかし、他面、福音といわれる神の言も必ずや何らかの自然的並びに文化的な媒介をもたないでは歴史の中に現実として実化することはない。そののみならず、信仰の現実には照して見るならば、キリスト教は単なるミスティシズムではなく、神からの歴史的な啓示を通して信仰が成立しているのであって、歴史上のイエスの存在を無視して直接無媒介的に神の福音が或る特定の個人或いは社会に実化するのではない。キリスト教の信仰における今も生けるイエス・キリストが直接的に個人或いは社会に働きかけるという場合も、歴史的な出来事としてのイエスの地上の歩みと無関係な靈的な経験というものはあり得ない。ましてやイエスの教えは聖書に記されているのであり、それに基いて、聖靈に導かれてその意味を理解するというのがキリスト教の正統の信仰成立の仕方である。こう考えるならば、福音の土着化といわれるものは、歴史的に現わされた神の福音を前提としての概念であることが明かである。神学的にもそれゆえに、神の言はそれを信ずるものによって語り伝えられることに理解されている。その根拠はパウロの「聞いたことのない者を、どうして信じることがあるうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあるうか。」(ローマ人への手紙一〇ノ一四)という言葉や、初代教会の異邦人への伝道者ピリポに対するエチオピア人の「だれかが手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」(使徒行伝八ノ三一)などに明かである。こうして福音は事実上、世界に歴史的現実を媒介として伝えられたのであるから、福音とキリスト教とは切り離すことのできないものである。しかしながら、福音とキリスト教とが全然同一であるかと言えば、これには神学的に大いなる疑問が起るのであって、キリスト教というときはこれは明かに社会学的な文化的な性格をもっている。それは歴史的な教祖をもち、経典をもち、伝統的な集団と組織とその活動様式をもっているところの一種の宗教である。それが宗教であるかぎり信仰的に考え

る場合にも単に神の働きだけでなく、そこには人間の自由意志による活動の成果が織りなされているものと考えねばならない。神学的に或いは信仰的に「キリスト教」と「福音」とを一応区別して考えねばならないという理由はここにある。「キリスト教の土着化」と「福音の土着化」の場合の比較もほぼこれで明かになったものと思う。ところで、われわれの社会学的理解の場合はどうであろう。社会学的には主として、「キリスト教の土着化」が問題となるのであるが、これを神学用語での福音の土着化という場合も、現実の福音の土着化の研究は歴史的な福音形態を除外しては考えられないのである。ただこの場合は、歴史的に種々純粹さを失った一箇の宗教としてのキリスト教という立場からだけでなく、その歴史的キリスト教を成立せしめたところの歴史的ないわゆる福音が、いかにして或る特定の地域や民族や社会文化に伝達され、そこに根を下ろすに至るかを考察することとなるのである。そこには当然自然及び文化的要素を媒介とするがゆえに、これは社会学の対象になることは明かである。

二、福音と固有社会・文化との関係

福音が土着化するために、先ず考えねばならないことは、福音が社会・文化に対してもつ神学的な機能である。福音は元来神の言であるから、この世界と自然的な連続関係にはないものであるが、しかも言は他者と接触をもつための媒体である。異質的にして非連続なものが連続を目指すところに言葉の本質がある。キリスト教と他の諸宗教との関係の神学的考察については、クレマー⁽⁸⁾その他の優れた研究がなされているが、異質であり、非連続であるものが、人格において結ばれ、接触或いは話し合いの場を見出すのが福音の目指すところである。その際、接触の結果、二つの接触関係が生れる。一つは審判であり、他は救済である。この神学的理解を社会学の立場から考察するとき、いかなる関係として認識されるであらうか。福音或いはキリスト教が土着化するまでには、その土地の固有社会・文化との間に、先ず少くとも論理的な対決は避け難い。その他権力又は伝統等の社会的な非論理的な対立要素も加わ

り、キリスト教に対する反撥は、キリスト教が伝えられた場所では、殆んど例外なく見られるのである。日本の場合もその例外ではなかった。第二にしかし、福音の救済面を考慮に入れなければならない。福音はこの世の罪性に対する審判と同時に、この救済を生命とする。そこにキリスト教の固有社会に対する幾多の奉仕的社会活動の生起する根拠がある。この審判と救済という矛盾した福音の二面を社会学的に見るとき、それはキリスト教の固有社会・文化に対する批判と更新という文化的機能として理解されるのであって、これらを通して土着化の現象が生じ得るのである。しかしこの対立面があまりにも強く現われるときは、最初の接触においてすでに共存は許され難くなるのである。又その面があまりにも弱くなるときはキリスト教本来の機能がなきに等しいものとなり、その様な形における土着化は殆んど無意味と考えられるに至るであらう。かくしてわれわれの問題は、実質上、第三の問題に移行する段階となる。

三、土着化の過程と可能性の問題

ここで考えたいことは、土着化の成立するための社会・文化的な客観的な条件であるが、考察の論理として先ず考えられるのは、固有社会・文化との間の接触を前提とするということである。その際少くとも二三の場合が考えられる。第一は新文化が量・質ともに旧社会・文化を圧倒して土着化する場合であり、第二は、新文化が質的に変改又は旧文化に妥協・習合することによって土着化する場合であり、第三は新旧文化に大なる変改を見ず、大体原型のままでの共存を通して土着する場合である。第一の例としてはローマにおけるキリスト教が考えられる。ここでは市民生活が完全にキリスト教に溶け込んでゐる。第二の例としては、中世インドのマラーバール地方に土着したキリスト教の場合が考えられる。この際はキリスト教徒はインド化して自ら一つのカスト的存在となり土着化の現象を示している。^⑩ また日本のキリシタンの場合には、一時九州地方で藩ぐるみ、島ぐるみ、村ぐるみ、家ぐるみの信徒を得、土着

化の可能性が見えたが、やがて弾圧され、その中のあるものは「かくれキリシタン」⁽¹⁾となり、異教的なものとの習合的なキリシタンとして、或る意味での土着化の現象を示している。しかしそれはほとんどキリスト教の原型をとどめぬほどの形態に更改しているので、キリスト教の土着化の例証に数え得るかは疑問である。

次に旧社会・文化との關係を、特に諸宗教との關係として考えるときどうであらうか。この際もキリスト教が諸宗教と論理的対決を経て人心を圧倒的にかち得るか、或は唐代の景教の様に妥協的となる場合、および双方とも比較的固有性を保持しながらの共存の場合等が考えられる。しかし妥協の場合は、シンクレティズムの問題が生起し、キリスト教の立場からの本来的な土着化と考えられないことはいうまでもなく、残るは諸宗教と対決して土着化するか、諸宗教と共存して土着化する二つの可能性である。しかるにわが国においてこれを見れば、儒教・仏教・神道などと論理的対決を経て土着化するということも、共存して土着化するということも近い将来に考えることは不可能である。仏教が土着化するのにかに長年月を経たかを考えるならばこのことは明かである。キリスト教の土着化の困難な要素として、家庭内の神道及び仏教に対する問題が強く作用している。神棚や仏壇との關係の如き、これらのことの実証的調査はキリスト教の土着化の問題考察に有力な資料を提供する。⁽³⁾

次に習俗又は国民の生活様式等との關係においてこれを考える場合どうであるか。この点に関しては今まで多くの論者が言及しているのであり、たとえば、キリスト教会の外的諸様式等において、日本的なものを採用するという道も考慮されている。教会堂の建築であるとか、音楽、聖画等の芸術的表現を通して国民に親しみ易いものを考察する等の方法である。これはその昔、キリシタンが採用して或る程度まで成功したのであるが、プロテスタント宣教百年を経た今日、急いでその様式を改めるといふことは却って技巧的に反映するのであり、土着化を促進するものと断定できない。しかしこの様な外的形態においては、信仰内容と異り、或る程度の変改はキリスト教の本来性を歪めることなしに可能である。キリスト教を文化社会学的に考察する場合、それは一種の文化複合を形成しているのであるか

ら、その複合の組成要素としての文化素型 (cultural trait) は部分的に交替又は代置される可能性がキリスト教の歴史において見られるのである。⁽¹⁴⁾ このことは日本においてもあり得ることである。そこにいかなる構想がもたれるかが将来の興味ある問題とされている。⁽¹⁵⁾

土着化と信徒の階層の問題が考えられる。キリスト教が、国民の全階層に浸透すること、又は大衆化することは土着化の条件として最も必要なものの一つである。このことは今日日本のキリスト教界においても自覚され、農村伝道・職域伝道などの具体的方策として、各層への宣教が進められている。しかし他面、キリスト教がわが国において中間層又は知識階層の間に支持を得ている現状は偶然でない。彼らはその生活の現実的基盤において不安を感じるものであり、且つ又、存在についての根源的な反省に適した立場にあるからである。この様な信徒の社会的性格はにわかに変化するとは思われない。それにも拘らず、今日の都市・農村自身の急激な変化現象を考慮に入れるならば、現在のキリスト教徒の階層的構造が将来までも固定的なものであるとは認められない。ローマにおいても都市よりも農村がキリスト教の受容においておくれたが、やがて全土にキリスト教は土着化した。日本とローマとは事情が違うけれども、この史実は日本におけるキリスト教の土着化の見透しに或る程度の暗示を与えるものである。

もう一つの土着化の条件としては、キリスト教の社会的な機能を通してということである。或る論者は、キリスト教の土着化について、風習的な意味の土着化と、問題的な結合を通してのそれとを挙げている。その例証として前者では、ドイツの教会は、ドイツの風習の中に完全にとけこんでいるのに、青年は今や教会に來ないし教会は世を動かしていない。これに対して、後者の現代社会の問題と取り組んだ結合においては、ドイツ人の中でいつも力強い何かを生み出していると言っている。⁽¹⁶⁾ これは社会学的には機能を通しての土着化と考えられる立場である。土着化のためには、姿が同じ様になるだけでなく、動的に共に生きるといことが有力な条件である。

以上は主として土着化の社会・文化的条件についてであったが、文化の土着化のためには自然的風土という条件が

強く働いている。この点、キリスト教は砂漠的背景に生れた宗教であり、日本は農業国であるから、両者の思惟の性格は根本的に類型を異にする。前者が自然を越えたところに生命の源泉を考えるのに対して、後者が自然の中にこれを認めようとするのはその最も顕著な違いである。更に人間の生の見方そのものが、前者は神により支えられて存在すると見るに對し、後者は生の自立を考える。この様な思惟の相異に、異った自然な条件が横たわっているとすれば、キリスト教の土着化が容易でないことは肯ける。

しかし、他面、風土的な要素は漸次社会的要素によって置換えられる傾向をも示しているのであるから、われわれは土着化の可能性の問題に余りに多くの自然的要素を取り入れることは容認し難い。

結 語

これを要するに、キリスト教の土着化は文化社会学的には文化伝播現象に属するものであり、文化接触変容 (acculturation) における一応の到達点でもある。しかるに、それは必ずしも人為的に急速に行われるものではない。この現象のためには相当の時間を要するものである。物質的文明の進歩変化は近時極めて急速であるけれども、精神的文化又は信仰の如き、もっとも保守的な性格をもつものであるから、その土着化の現象の如きは意図的に短期間で実現できるものではない。それを余りに人為的に行うときは却って反撥の現象が現われるのが常である。

他面、日本の社会・文化の趨勢としては、近時都市も農村も著しく急激に変貌しつつあり、古い習俗も急速に変化しているのである。又世界文化の多様性にもかかわらず、一様化という傾向も顕著であるから、キリスト教の日本における社会・文化的地盤そのものが変貌し、或る意味で世界化しつつあるとも考え得るのである。かくて、世界的宗教としてのキリスト教に対する感覚もいつまでも同じであるとは限らないので、外来教という印象が案外に早く国民の脳裏から払拭される見込は絶無ではない。その際にも問題は、キリスト教が本来的な「地の塩」⁽¹⁷⁾としての味を失う

ことなしに、いかに日本社会に浸透することができるといふことである。

- (1) 城崎進「イスラエルとカナン」(『日本人と福音』 日本基督教団出版部、昭和三十七年)
- (2) 印具徹「教会史における福音の土着化」(『日本人と福音』 日本基督教団出版部)
- (3) 竹中正夫訳『世の光キリスト』— WCC 第三回世界大会報告書— 新教出版社、昭和三十七年、三七、七二〜七三、一四二頁。
- (4) 佐古純一郎「地の果てにまで」(『福音と世界』 昭和三十七年十二月号巻頭言)
- (5) 大村勇「一致の上で体質改善」(『キリスト新聞』 昭和三十八年一月一日)
- (6) 「第四回信仰職制世界会議への報告書から」— 土居真俊教授執筆— (『キリスト新聞』 昭和三十八年、八四九号〜八五五号)
- (7) 有賀鉄太郎「いわゆる土着化について」(『基督教新報』 昭和三十七年十二月八日、三三三六号)
Tetsutaro Ariga, "The Problem of Indigenization," in *Japanese Religions*, Vol. 3, No. 1, Spring 1963.
- (8) H. Kraemer, *The Christian Message a Non-Christian World*, London, 1956; Kraemer, *Religion and the Christian Faith*, London, 1966; Kraemer, *World Culture and World Religion*, London, 1960;
小林栄「クレーマーにおける福音と諸宗教の問題」(日本基督教団宣教研究所『世にあるキリスト者』昭和三十五年) NHKテレビ「十字架のある社会」(昭和三十九年九月十日)に、その説明として、「ヨーロッパ文明の源流といえるキリスト教が欧米諸国の近代化にどのような意味をもってきたか、また今後どんな方向をたどるかをイタリアで取材したものの。修道士の生活、宗教にとけこんだ市民生活」とある。(『朝日新聞』)
- (9) 溝口靖夫『東洋文化史上の基督教』 昭和十六年、理想社、一一八〜一一九頁。
- (10) 田北耕也「五島の切支丹」(『切支丹風土記』 九州篇、昭和三十五年、宝文館、三〇三〜三三三頁。)
- (11) Hendrik Kraemer, *Religion and the Christian Faith*, London, 1956, chs. 24, 25; 溝口靖夫「キリスト教と異教的社會日本との間の距離の問題」(『神戸女学院大学論集』 昭和三十六年二月、七卷三号一〇頁。)
- (12) 土居真俊、溝口靖夫、小林栄『日本におけるキリスト教と諸宗教の接触の問題』 日本基督教団宣教研究所、昭和三十

五年、付録、研究資料、（他宗教からの基督教への改宗者に対する調査。）溝口靖夫・雀部猛利・難波紋吉「キリスト教主義女子大学生の宗教意識についての実証的研究」昭和三十七年二月、六月、三十八年二月―仏壇、神棚に対する家族の態度調査の部参照）

(14)

溝口靖夫『宗教社会学研究』昭和二十八年、関書院、一八七―一八八頁、溝口靖夫「キリスト教と異教的社會日本との間の距離の問題」、『神戸女学院大学論集』七卷三号二四頁。）

(15)

Vern Rossman, The Breaking in of the Future, The Problem of Indigenization and Cultural Synthesis, in The International Review of Missions, Vol. LII, No. 206, April 1963;
M. M. Thomas, Indigenization and the Renaissance of Traditional Cultures, in The International Review of Missions, April 1963.

(16)

鈴木正久「教会の土着化について」、『福音と世界』昭和三十七年九月号、四七頁。）
マタイによる福音書五章十三節。

(17)

A Sociological Understanding of the Indigenization of Christianity

Résumé

Since 1959, the centenary of Protestant mission in Japan, the problem of indigenization has been given a increasing amount of study in Christian journals and conferences.

The question arises as to whether Christianity in the near future can sink its roots deeply in Japan when we consider that after a century of evangelical effort less than one percent of the population are baptised Christians.

The problem is of theological concern insofar as it involves the Gospel, and it is of sociological concern insofar as it involves religion as a social phenomenon. Even when we speak of the problem using the theological terms "Gospel" or "Logos," it nevertheless takes the form of human culture in its historical incarnation. Thus the problem becomes one for sociological discussion.

There are three possibilities of the indigenization of Christianity in a so-called gentile country such as Japan. The first is indigenization through the process of absorption of the old cultures or the elimination of the old religions by Christianity; the second is the modification of Christianity by the old religions; and third is coexistence. As a matter of fact, the third is the only possible prospect. This process is understood sociologically as "acculturation." Thus the indigenization of Christianity in Japan will be possible at least after a certain period of time with the development of the sociocultural conditions of acculturation.